

は　じ　め　に

この研究年報は創刊三周年をむかえる。前身は「研究の総括と方針」という冊子であった。そして、それ以前は何もなかった。

60年代末より、一橋大学体育科では共同研究室を設置し、助手を採用し、共同研究体制を一步一步整えてきた。研究・教育の組織的な取り組みこそ全体の力量を高めていくことになると考えたからである。この研究年報は、そうした10数年来の努力のうえに立って、新たな飛躍をしていく橋頭堡であるといえる。

したがって、この研究年報はたんに個人研究の成果を集めたものではない。本号についていえば、「国民スポーツの国際比較研究」を共通テーマにかかげて、この数年来積み重ねてきた共同研究の集团的、組織的成果をその内容としているのである。そこには、個人研究と集団研究との相対的自立、相互関連という困難な課題がどのように解決されようとしているのか、ひとつの試みが示されている。

今年度は、一方において国民スポーツの地域的研究がさらに深められ、他方においてスポーツの本質にかかわる原理論的研究が一步すすめられた。その多くはこれまで既存の研究が意識的か無意識にか取り残してきた分野に属するものである。たとえば、日本のプロレタリア・スポーツの生成過程、イタリアのファシズム期のスポーツ運動など、それ自体として先行研究がほとんどわが国に存在しない分野が研究対象にされている。これはたんに未開拓の対象に陽光をあてただけでなく、従来のわれわれの研究方法、課題意識の新たな到達点を示すものである。というのは、これまで看過されてきた部分の研究がなされるにつれ、われわれ自身のパラダイムが問われることになったからである。すなわち、スポーツとは何かを再度歴史と社会に位置づけて考え直さざるをえなくなったのである。プレイ論の再検討、主体形成論などはそうした原理論的研究にたいするわれわれの新たな出発点を示すものである。

この研究年報にまとめられた共同研究の特徴として、もうひとつ指摘しておかねばなら

ないのは研究情報の意図的な収集体制のうえに立って研究が行われたということである。近年、海外での研究、資料収集が増え、研究情報源の拡大がすすんでいる。そこで得られた情報を最大限に利用していくために、われわれは在外研究の機会をもったメンバーにたいして事前、事後に研究情報の交流の場を設定してきた。相互に情報を公開し、相互に利用していくことが、長期的に見て個人研究の限界を克服することになると考えるからである。

国内情報については、定期的に開催される時事問題検討が重要な役割をはたしてきている。専門誌を中心に注目すべき論文、事件などを取り上げ、それらについての論評、分析をすることによって情勢判断を共有する努力がなされた。その点では共同研究室助手の日常的な情報収集の業務が大きく貢献してきたことをここに指摘しておきたい。また、研究・教育用の文献について、長期的な展望のもとに収集を続けてきたが、小平分館のスポーツ・体育関係図書が助手の整理・注文作業を通じて大いにすすんでいることも指摘しておきたい。

最後に、この研究年報は、われわれの「手づくり」であることを強調しておきたい。原稿用紙づくりからはじまって、割りつけにいたるまで共同の作業によるものである。研究成果を公表する方法としてはきわめて手工業的であるが、逆にそうした意欲が共同研究自体に活力を与えたといえよう。しかし、客観的には、こうした事態は大学財政の逼迫を反映している。大学における研究活動を保障するために現状の改革は大きな課題である。

この窮状を見るに見かね、共同研究の推進に役立てよとの御趣旨で、かつてわれわれのスタッフであった鈴木正先生から今回大きな御援助をいただいた。先生は現在の共同研究体制の揺籃期に在職され、その後の進展に期待を寄せられていたのである。ここに感謝の意をあらわすとともに、今日の基礎をつくっていただいた多くの先人に、われわれの成果をもって応えていくことを誓いたい。

(唐木 國彦)